

変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

喝采の舞台裏

Technique Championship 連載第1回

1994年3月9日から5日間にわたり、第31回全日本スキー技術選手権大会と、
引き続き、第24回全日本デモンスト레이ター選手会が野沢温泉スキー場で行なわれた。

来る1995年の第15回インターナショナルスキーへの前哨戦ともいえるこのふたつの大会は、日本のスキー技術の指導理論や実践の現状を映し出す鏡の役割を担う大会である。

渡辺一樹ら、トップデザイナたちはそこで何を目指そうとしているのか。

文：吉賀仁郎 写真：上田勉／編集部



第31回技術選を制したのは、2度目の出場のマーク・ガルシア（フラン3）だった

第31回技術選ば
どう準備されたか

「技術選が変わった。」

技術選手権大会の周辺から、そうした声が聞こえてくる。「日本でいちばんスキーのうまい

の疑問といった声が聞こえていたのである。全日本スキー連盟(以下、SAJ)の教育本部のなかで、次からの技術選をどうするかが論議され、30年の歴史を積み重ねてきたこの巨大なイベントは、大きく改革されるところになった。

語られ、「このまま行けば日本人のスターの影が薄くなり技術選の人気が落ちるのではないか」という不安も出ていた。外国人選手がどんないいすべりをしたところで日本人のスキ 技法の進歩に何の役にも立たないとする不満も聞かれていた。

技術選定30年の経緯で
生じた5つの問題点

問題点は5つほどあつたと思われる

確かに岩鞍での2回の技術選で使われた斜

面は、急ヴエ(急斜面ウエーデルン)自由不整地、総合滑降の2種目を除けば、競技用のボーンはよく整備され、初心者中級者でもすべれるような易しい斜面であつた。「あんな易いところをすべてって日本一を決めるなんて」という不満は当然だつたろう。

八方尾根で行なわれていたときのような難度をもつ斜面でやらなければならぬといふ。

2、出場者の絞り込み

予選、準決勝、決勝という日程の進行に従つて、300名を越える出場選手の数を制限してはどうか。ジャッジの疲労を考慮し、公正を期するためにも強い要望が上がっていた。

3、審判員の資質の向上
ジャッジの視点の統一、公平さについての
疑問に応えるためには、審判員を再教育する
必要性が強調されていた。

4、種目の見直し

縛り、個性を發揮することができない。そわ
ぞのスキャナーの資質を殺してしまつ」と
いう意見が多く出され、技術指定をはずす
とが検討されていた。

野沢温泉に準備された
画期的なバーン

野沢温泉スキー場に準備された斜面は、従来のどの会場と比較してもはるかに難度の高

- 競技種目は予選4種目は
1小まわり（中斜面不整地）
2小まわり（急斜面整地）
3大まわり（急斜面整地）
4総合滑走（凸凹面、整地）

4 総合演習（中斜面不整地）
というようすに技術の指定ではなく、大まわりか
小まわりかが指示されるのみ。そして、演じ
るバーンはそれぞれ性格の違った斜面が用意
されたのである。

この状況設定は、準決勝、決勝と段階を追つてより厳しいものになつた。

与えられた斜面状況を読んで、どうすべる

か、それはそのスキーヤーの技術の幅、その内容の高さ、個性を試すための絶好のシチュエーションといえたろう。

前回までの技術選の問題点として指摘されていた5つのテーマのなかで、1の斜面の難度、2の人数の絞り込み、4の種目の見直しという3点を完全にクリアしたといつていい。残されたテーマは3の審判員の目と5の外国人選手の扱いの2点になつた。

予選で注目された種目は2日目の総合滑降であった。深いコブの急斜面は前夜からの寒気によつてヨーロッパ並みのアイスバーンになつていて、この斜面状況は、第22回の大鷗の急斜面と並ぶ高難度のものといえた。

女子から進められた競技は開始早々、第1走者が転倒、タンカで運ばれ、重い空気のなかで進行した。「どうするか」、まさにインチユースキンスキーゲームが試されたはずである。

外国人選手の抱いた日本型スキーへの感想

出場2回目のマーク・ガルシア、前回優勝のマイク・ファーニーが、その斜面に見事な対応を見せて感嘆の声を上げさせ、佐藤譲や山崎元義が転倒して、ギャラリーの間から悲鳴が聞こえた。

どう読むかが試され、暴走するスキーヤーが斜面に排除され、暴走を恐れてコントロールを重視した選手たちは評価を下された。

審判員たちはその種目に速さ強さを求めたのだろうか。

「コントロールされた速さ」と語った審判員がいるし、「余裕あるすべりに高い評価を与えた」という審判員がいる。

マーク・ガルシア、マイク・ファーニーが見せたスキには、十分な切れと走りを感じられ、それは余裕を生んでいた。

ふだんから困難な状況をすべてている彼ら

の自信があの難しい斜面を楽にすべることにつながつていた。

マーク・ガルシアは語つた。

「日本人はなぜ自分の好きな斜面しかすべらないのだろうか。スキーリングというスポーツは、あらゆる状況のなかですべきことが楽しみのひとつだ。自分のすべての条件を選んでばかりいては決していいスキーヤーになれないよ。僕らは困難な条件になればなるほど、そこにチャレンジするのに」と。

すべりやすい斜面ばかりを選んでいては、より自由な、より対応幅の広いスキー技術は身につかないと教えてくれるわけだ。

この種目女子のトップをとつた、カルガリーオリンピックのゴールドメダリスト、マリナ・キールは、「あの斜面はちょっとびり難しかつたわ。でも難しい条件だとやる気が出る。スピードが出てきないようにならう」と抑えたけど、楽しくすべれたわ」と笑顔で語ついた。さすがにワールドカップのハードなビデオをすべてってきた自信と余裕が窺えた。

育つてきた環境が違う、すべててきたスキーのスケールが違うといった理由以外に、もっと大きなものが違うのではないだろうか。私は、マークやマリナの言葉のなかにヨーロッパ、アメリカのスキーと日本のスキーの大きな質の違いを感じとつた。

欧米とのスキー観 違ひの意味すること

カナダ、アメリカを訪れるスキーヤーは多い。その日本人スキーヤーにとつてなんとも奇妙な光景がある。それはグルーミングされたすべりやすいコースがあるのに、そのコースをはずれた深いコブの急斜面にたくさんのが初心者が群がつてゐることだ。

ウイスラーのピークと呼ばれる頂上の急な大斜面は、黒菱のコブ斜面を10枚もつなげたような大斜面だが、その目もくらむ急斜面をたくさんの人たちがすべる。

もちろん、その斜面の対象となつてゐるの

技術選総合滑降でのすべり

通常の分解写真より連続のコマを表としてあるが、安定感を必ずほしい

フランス・ナショナルチームに8年間在籍し、その後、プロスキー選手として活躍。89年プロ・ツアーグランプリ優勝などの経験をもつマーク・ガルシア。第30回技術選にはじめて出場し、総合13位となった。今年の大会では、予選から好調。安定したすべりを見せ、この総合滑降でも、切れ味の鋭いスキーテクニックを披露した。

は、エキスパートスキーヤーと呼ばれ、エキセレントと呼ばれる上級者である。しかしながら、その超上級コースに、やつとブルークができる程度のオジサン、オバサンが挑戦し、子どもたちが笑い声を上げながらすべり降りている。その姿は不格好だが、実に楽しげで、どこにも悲壮感のかけらもない。日本ではおよそ考えられない風景なのである。

スキーを「かっこいいスポーツ」として様式美の世界に封じ込めた日本のスキーは、美しいフォーム、正しい技法を求めて、スポーツとしての奔放さを失なってしまっている。

お行儀のいい美しいフォームのスキーは、いつのまにかスポーツとしての自由さを失ない、管理されたものとなっていたのである。

「技術選が変わる」。それが第31回技術選だった。そこから発せられる新しい日本のスキーは、より自由で個性的なスキーとなるはずである。形にとらわれず、もつとさまざまな状況にチャレンジする勇気をもたなければ、ヨーロッパと同じスキーは生まれてこない。

第31回技術選は、予選、準決勝、決勝のそれぞれ4種目、計12種目を4日間でこなすハードなスケジュールで、過酷な競技を終えた。そして勝者は男子では1位マーク・ガルシア、2位マイク・ファーニー、渡辺一樹となり、女子でも1位に4年連続のマテヤ・スヴァーク、2位カチューシャ・ブスニック、3位マリナ・キールとなり、男女とも外国人選手が上位を占めることになった。

この結果から、「ワールドカップから引退し、ワールドカップで通用しなくなつた選手でも、日本のトップデモよりも上になれる。それだけ日本の技術水準が低いということの証明だ」と、冷たく言い放つ人もいる。

日本のスキースタイル 変革に動き始めた

しかしながら、その第1年目となつた第31回技術選では、その変化はまだ現われてはいない。

各種目の競技バーンのゴール付近に各県連のコーチ連中が集まって、それぞれのチームごとに作戦を指示している。

授は、「日本人ははじめに美しいフォームを求め、次に正確な操作というものを学び、それから転ばない強さ、そして速さを求めているように見える」と語り、その回路はヨーロッパの人々とはまったく反対なのだと指摘した。とにかく初心者の段階からフォームにこだわり、美しいすべりの形を求める日本人のスキー観を教授は笑っていた。

そしてスキーは、ます速く、強く、そして正確にとの望みを高めていくスポーツだったのだ。

日本人は雪の上で美しいフォームを求めるため、そのフォームですべれる斜面を探し、そこで反復練習するという習性がある。

標高差800m以上のコースを一息にすべるようなスキーヤーを見ることは少ない。

途中で立ち止まり、そこでウエーデルンなどと呼ぶ日本人しかやらないコチヤマゲスキーリを繰り返して満足感を味わっている。

そうした風潮は、1級准指導員といった上級者と呼べるレベルに入ったスキーヤーたちにも浸透しているのである。

技術選に技術指定があつた日本のスキー界では、より奔放な、のびのびとした自由なスキーは育ちにくい。

1年目の試みで 明らかになつた特質

1988年カルガリー・オリンピックでDH優勝という輝かしい戦績をもち、現役を引退後はコーチとしても活躍するマリナ・キール(ドイツ)。技術選初出場だが、女子総合3位となった。そのダイナミックなスキー操作は十分に現役時代を思わせる。ロングターンでは、女子4連覇を飾ったマテヤ・スヴェートをしのぐ、走りのいいスキーを見せてくれた



昨年、同じニシザワチームの渡辺一樹、佐藤謙を抑えて、総合優勝を飾ったマイク・ファーニー(アメリカ)。元ワールドカップ選手らしいスピードと状況判断力、日本のトップデモから学びとった豊かな表現力を合わせもち、非常に安定感の高いスキーを見せた。そのスキーを雪面から離さないコントロール能力は目を見張らせるものがある

見る者に美しいと見え、心地よい音楽を感じさせるスキーヤー、それがいいスキーヤーなのだ。

次の大きなステップは 来年の野沢温泉 インターフィンタースキー

さて、技術選を終えて、私たちにその音楽を聞かせてくれたスキーヤーは何人いたろうか。残念ながら私の感性を刺激してくれたのは外国人選手たちの何人かでしかなかった。優勝したマーク・ガルシアは「スキーは楽しい。私はワールドカップ、プロレースといい切り楽しんできた。そして、その次に日本のこの技術選を楽しむためにやつてきた。その結果がこうなったことに心から満足しているよ」と語っていた。

古い友人であるマークの勝利は私にとってもたいへんうれしい出来事だったのだが、そのマークが日本の雪の上に残した本物のスキーの楽しさを日本人は理解できるだろうか。

マークの1位を支持した審判員たちは、彼のすべりには余裕があつたと語り、技術の幅の広さを驚嘆してみせた。

私はそれにも増して、彼のスキーに取り組む姿勢、彼のスキー人生が彼のすべりに表現されていたと感じた。

2位となつたマイク・ファーニーのすべりもまた見事なものであった。その技法の高さはアメリカのスキー環境のなかで育まれ、日本の風土のなかで磨かれた完成品と見ることができた。

そして、彼らのスキーから新しい世界の潮流が見えてくると思うのである。

潮流という言葉は、インターフィンタースキーの人々の間によく聞く言葉である。会長であるホビヒラ教授は、インターフィンタースキー運動を語ると物であろう。

ホビヒラ教授は、「スキーがうまい」という

ことは、速さ正確さを満たし、さらに、

雪の上に快い音楽を奏てるようなシュプールを描き出せる者たちを呼ぶのだ」とも語つてくれた。

な流れであつた。それは今も樂しげな音楽を奏でながら流れているのである。

1995年シーズンのスキーワールドカップは、野沢温泉で開催される第15回インターフィンタースキーである。

私たちは、そこで世界のスキーの大きな流れを見、そして感じとることができる。インターフィンタースキーには、世界中のスキーを行なうすべての国が野沢に代表を送つてくるからだ。

スキー先進国のスキーヤーたちはどんなすべりをみせてくれるのだろうか。そして、世界の人々の前に日本のスキーはどう評価されるだろうか。世界的スキーの潮流は、インターフィンタースキーの場に立てば、歴然と見ることができるのである。

30年続けられた日本にしかない競技会技術選は、日本のスキーの流れを映し出してきたといえる。そして、日本のスキーがこれから流れしていく方向をも指示示しているはずである。

日本人だけが特異なスキーをすると見られ、日本人はスキーをヨーロッパとは違った視点で捉え、違った感性で別のものにしてしまつたと見られてきたのである。

第31回技術選が大きく変わり、日本のスキーが新しい方向へ流れを変えようとしているこの時に、野沢でインターフィンタースキーが開かれ、意義は大きい。

私たち日本人が、野沢の技術選で外国人選手たちから学びとったものは、新しい技術要素であり、新しい世界のスキーの流れであつた。その新しい流れは、どのような状況へも対応できる幅の広い技法ともいえる。しかも、その技法の上に彼らのスキーに取り組む姿勢や、彼らのスキー人生といったものまで感じとらなければならぬと私は思う。

今回のインターフィンタースキーは、一般の大衆スキーと触れ合うインターフィンタースキーとなるといわれている。

野沢に、世界のスキーヤーと交流を深め、世界のスキーを学ぶ、素晴らしいチャンスが、もうすぐやってくる。

(次回はインターフィンタースキーの舞台裏について)



技術選でマイクと並んで総合2位、5年連続日本人で最高の成績をあげた渡辺一樹の急ヴェでのすべり。その斜面への対応力には定評があるが、総合的な評価でわざわざ、優勝を逃した。だが、ケガを克服して奮闘は賞賛に値するだろう。日本のトップデモンスト레이ターとして、新しい日本のスキーをリードしていくよう期待がかかっている

